

# 15-e 社会学の立場から

東洋大学社会学部

田村 健二

## 1. 日本の産業主義と思春期の問題

日本の経済発展は、人的資源のうえでは「知的な優秀性、健康、企業への忠実性」をもつ労働者に大いに拠り、今後はいっそう省資源の知識集約産業による1人当たり労働生産性の向上が待たれている。こうした状況下で、これら3条件をもつ社会の期待基準に適合する労働者は、生涯にわたって厚い報酬がえられ生活福祉の実現もしやすい。学校は次代の期待適合の労働者を育てる画一化された苗床で、そこでは3条件に対応する「知的教育中心、体育・保健、組織への忠実性（校則遵守）」が生徒に要求された。しかも基準への適否が主に学力と出身校別によったから、受験戦争は熾烈化をきわめ、教育費は高騰した。

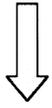
こうなると、親のもつ“庶民の夢”も“わが子に託す夢”も、ひとしく基準適合の労働者の生活に近づくとく、従来の連帯をといて孤立した弱小の余裕の少ない核家族化をもたらし、さらに共働きをも辞さないことになった。子どもに対しては、3条件に対応する、「勉強・進学、健康・安全、従順な“よい子”」を中心とする育児に努め、この役割期待さえ遂行すれば、その余の生活では溺愛・過保護的な報酬をあたえたのである。

大部分の能力のある子どもは、この親や学校の役割期待による支配-依存型を、少子化による集中下に受け入れた。思春期の混乱は、進学期を迎えての役割遂行の困難性に端を発し、従来の支配-依存型からの独立、性を含む心身のアンバランスの発達、親の支援の限界などを契機として生じる。ここで子ども別の対応があるが、多くは社会適（順）応的になっていく。しかし、能力、価値志向、家庭の不安定化などのために、社会・学校・親の期待基準に不足する“落ちこぼれ”の子どもも生じてくる。

思春期の混乱と“落ちこぼれ”の中から、登校拒否などの逃避、家庭内暴力などの葛藤、そして非行などの逸脱的選択の諸行動が現われ、これらの中には性的問題や自傷他害の問題も出現するのである。なお性的問題は、今日3条件を中心とする期待基準の外におかれ、3条件さえ損わなければの許容範囲に移行しているよう。“性的規制の弛緩”といわれるゆえんである。

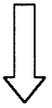
## 2. 思春期医学と保健の対応

一つは、こうした動向を前提として、いわば思春期の心・身・社会的な発達にあやまちなきを期し、次代の労働者を育てる守りの方向である。二つは、将来の日本社会を見通して、子どもの主体性の発達（自己実現）を中心に、創造性や愛と連帯にもおよぶより広い新社会基準の設定をして、その子ども時代の発達完成期として思春期をとらえ、その支援として医学と保健を位置づける建設的方向である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 2. 思春期医学と保健の対応

一つは、こうした動向を前提として、いわば思春期の心・身・社会的な発達にあやまちなきを期し、次代の労働者を育てる守りの方向である。二つは、将来の日本社会を見通して、子どもの主体性の発達(自己実現)を中心に、創造性や愛と連帯にもおよぶより広い新社会基準の設定をして、その子ども時代の発達完成期として思春期をとらえ、その支援として医学と保健を位置づける建設的方向である。